

【氏名】 田中裕士

【所属大学院】（助成決定時） 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】

ヒンドゥー教における現世放棄者サードゥーの苦行実践と近現代インドの社会変容に関する人類学的研究

【研究の目的】

本研究の目的は、ヒンドゥー教における現世放棄者サードゥーのもつ独自の社会性、およびサードゥーと一般家住者との関係性の現代的様態を把握することである。輪廻からの解脱を志向するサードゥーは、一般家住者の社会秩序を超出して、それを創造的に相対化する。そのため、その存在はヒンドゥー社会の重層的な理解の上で決定的に重要であると見なされてきた。ところが、先行研究の多くには、文献学的な知識に依拠した「端的に社会から離脱した孤高の隠遁者」という非時間的なイメージが投影されており、その現実的な生のあり方については一面的な理解にとどまってきたといっても過言ではない。

実際には、サードゥーは非社会的な孤高の隠遁者なのではない。そうではなく、サードゥーは村落共同体の内部において家住信奉者と親密な関係をもちつつも、同時に、家住者の現世的な社会生活を超越し、その外部において、明確に区別されたサードゥーの共同体を生きるのである。

【研究の内容・方法】

サードゥーの研究には大きく分けて二つの共同性の様態を峻別する必要がある。第一に、サードゥー同士が全インド的な規模で形成する独自の共同性のレベル。そして第二に、それぞれのサードゥーが個別の地域において信奉者と形成する相互依存的な共同性のレベルである。これまでの研究では、前者の考察に重点を置き、全インド的な規模におけるサードゥー特有の共同体に着目して、そこにおける規律化作用の結果として、他動詞的かつ自動詞的に、苦行実践の主体性が漸次的に獲得形成されてゆくことを明らかにしてきた。

これをふまえて、本研究では、グジャラート州におけるアーシュラムを中心に、新参者として苦行実践に参加することをおして、後者の家住信奉者とサードゥーとの日常的な相互作用に注目した。苦行実践の修得は、何よりもまずサードゥー独自の食物の調理法を徹底して身につけることから始まる。時節に応じた食材の規定、サードゥー独自の呼称、調理法等は、詳細にわたって極めて厳格に規定されている。新参のサードゥーは、後に放浪遊行して他のアーシュラムに寄宿する際、当地においてしかるべき作法で調理してみせることで、自らの苦行実践への真摯な姿勢を試されるのである。サードゥーはあらゆるカーストの一般家住者から分け隔てなく食材を受け取るが、原則として家住者の調理したものは口にしない。サードゥーは自己の生の全体を超越神への供犠とすることによって、自

らを神と同一化させてゆく。そのため、日常的な食物は全て供物として超越神に捧げることとを本義とし、その後神の恩寵として全員に等しく分与される。

こうした食物に関する姿勢が示すように、サードゥーはあらゆる日常的生活実践をとおして、現世放棄による神性の内面化を家住信奉者に対して証明せねばならない。家住信奉者はそうしたサードゥーの苦行実践を物質面から援助するが、それは彼の生が超越神の顕現を感得せしめる限りにおいてである。

【結論・考察】

原則的に、家住信奉者はサードゥーの苦行実践を下支えする奉仕者である。彼らは精神的恩恵を受けるべく無私の奉仕を行うが、サードゥーはそれを超越神との垂直的關係において善きカルマへと変換させなくてはならない。このように、サードゥーはあくまで超越的な視座から個々の信奉者に規範を与え、それを承認するのであって、両者は徹頭徹尾同一の地平には立たない。その反面、このような両者の非対称的な関係性は、日常実践において家住信奉者からの不断の眼差しを聖性へと昇華させる限りにおいて担保されるものである。村落地域においても消費社会化と軌を一にした宗教政治化の波が押し寄せる現代のインド社会においては、家住信奉者からサードゥーに向けられる眼差しは質的に変容しつつある。そうした中で、生の全体的な様式としての苦行実践は、変容する社会の内部において、いかにしてそこから超出するのかを試金石としている。現代における苦行実践の課題と展望はここにある。